

延慶本平家物語頼朝拳兵譚考

——第二末「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」の諸問題——

中 村 理 絵

はじめに

延慶本の頼朝を考察する上で、拳兵に関連する一連の話（以下拳兵譚と称する）を考察する必要がある。これらは語り本系諸本には見られない話群であることから、読み本系の有り様を考える先行研究で多く題材として取り上げられてきた。

山下宏明氏は、頼朝が將軍という栄光の座を得た、後日からの逆照射によって描かれた、人々の献身を語る物語として定義され⁽¹⁾、砂川博氏は延慶本の叙述姿勢に対して、「一定の事実の上に虚構の網をかぶせたもの」と論究されている⁽²⁾。又、松尾葦江氏は延慶本と吾妻鏡との記事を比較、検討し、「いくさ語り」の存在を提示されている⁽³⁾。

本稿では拳兵譚の中でも延慶本第二末「佐々木者共佐殿ノ許へ参事」を取り上げる。この章に関しては柳田洋一郎氏の先行研究があり、本稿では主に三章で触れていきたい。一武士である佐々木が頼朝との関わりの中でどのように働き、物語構想に機能したのか。

本稿は「佐々木者共佐殿ノ許へ参事」で佐々木の言葉、及び頼朝の言葉伝承を主に取り上げ、彼らにどのような構想の下で言葉があてはめられたのかを検討し、いくつかの問題点を考証する。

問題点として①大庭景親や渋谷重国との結び付きをどのように処理し、物語に取り込んだか、②物語本文に重視される二郎経高の存在が意味するもの、③頼朝の言葉伝承―頼朝の冥加と関わって佐々木の遅参を物語がどのように解釈しようとしたか、以上を順に考察していく。

一 大庭景親の脅威が取り巻く頼朝の挙兵

「佐々木者共佐殿ノ許へ参事」の冒頭は、院宣を賜った頼朝と時政の会話である。時政は頼朝に東国武士の名前を挙げ、「広経、経胤、義明、是等参人ダニモ参候ナバ、日本国ハ御手下ニ思食ベシ」と語り、後日、時政の言の通りになつたと記している。その時政の言の中に

若シ君ヲツヨク射マヒラセ候ワムズルハ、畠山庄司次郎重忠、同従父兄弟稲毛三郎重成、是等ガ父畠山庄司重能、同舎弟小山田別当有重、兄弟二人、平家ニ仕ヘテ、京ニ候ヘバ、ツヨキ敵ニテ候ベシ。相模国ニハ鎌倉党大庭三郎景親、三代相伝ノ御家人ニテ候ヘドモ、当時平家ノ大御恩者ニテ候之間、君ヲ可ニ奉背者ニテ候

と、大庭に関する記述がある。畠山が「ツヨク射マヒラセ」る者、「ツヨキ敵」と称されるのに対し、大庭は「背くべき者」と、頼朝への反逆者であることを時政の言として明記しているのである。

源平盛衰記でこの箇所は

此ニ相模国住人大場三郎景親ハ既三代相伝ノ御家人ナレ共、当時平家ノ重恩ノ者ニテ其勢国ニ蔓レリ。又武蔵国住人畠山庄司重能・小山田別当有重、平家ノ大番勤テ待ナレバ、重能ガ男重忠・有重ガ男重成、同可ニ奉背。其勢景親ニ劣ルベカラズ。

と、大庭の記述よりも畠山の記述が詳細であり、延慶本に見られた「背くべき者」という思想も、畠山と「同じく」と、大庭も並べて述べられるものの、記述の主体はやはり畠山に向けられているといえよう。

長門本はこの部分に関して

もし君を、つよくぬまいらせ候はんずるものは、はたけ山の庄司二郎しげたゞ、じふ兄弟、いなげの三郎しげなり、是等なり。父はたけ山の庄司しげよし、おなじき弟、小山田別当ありしげ、兄弟二人、平家に仕て候へば、つよき御かたきにて候べし。相模国には、かまくらとう大ばの三郎かげちか、三代さうでんの御家人にて候へども、たうじ、平家の御をんのものにて候へば、君を、ぬ奉らんずるものにて候。

と、延慶本が畠山に対して用いた「つよくぬまいらせ」る者という記述を、大庭にも適用している。延慶本・源平盛衰記・長門本を比較すると、延慶本では、より大庭への「叛逆者」としての意識が強いことを読みとることが出来る。う。

本稿で扱う延慶本第二末「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」「十 屋牧判官兼隆ヲ夜討ニスル事」でも、大庭への意識が読みとれる。

佐々木兄弟が頼朝の許へ参じる際、「ツ、ムトスレドモ、景親是ヲ伝聞テ「イカッスベキ」と、国中人々ニ云合スルヨシ聞ヘケリ。」(九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事)と、佐々木兄弟参陣という、頼朝拳兵の頼もしさの裏に、頼朝が大庭の脅威に晒されていく弱さが描かれ、又、「廿日マデ延バ、還テ景親ニ襲ハレヌト覚ルナリ」(十 屋牧判官兼隆ヲ夜討ニスル事)と、頼朝が自らの言葉の中で景親の脅威を語っている。

延慶本、長門本ともにこの箇所はほぼ同じ記述であるが、源平盛衰記は佐々木兄弟の参陣に関する記述が二本に比べて簡略であり、これらの記述を抱えていない。

石橋山合戦で見える、時政と大庭三郎との名乗り合いに関しては、三本の中で源平盛衰記が一番詳細に時政と大庭とのやりとりを記している。「イカニ口ハ口、心ハ心ト、三代相伝ノ君ニ敵シ申ゾ」「先祖ハ誠ニ主君、但、昔今ハ今。恩コソ主ヨ」（巻第二十「石橋合戦」と記し、延慶本の「三代相伝ノ君」である頼朝に弓を引く大庭の、「恩」を重んじる言葉と同質である。

石橋山合戦のみならず、全体に渡り源平盛衰記は延慶本・長門本と比較して大庭の記述が多いながらも、「巻第十九 兵衛佐催「家人」」「巻第十九 佐々木取馬下向」で頼朝拳兵に付きまとう大庭の脅威が描かれないのはなぜだろうか。

それは延慶本と源平盛衰記では大庭への視線が異なるためと考えられる。

延慶本で大庭が最後に登場するのは、第二末「二十 畠山兵衛佐殿へ参ル事」で、

大庭三郎此次第ヲ聞テ、叶ワジト思テ、平家ノ迎ニ上リケルガ、足柄ヲ越テ、藍沢宿ニ付タリケルガ、前ニハ甲斐源氏ニ万余騎ニテ駿河国へ越ニケリ。兵衛佐ノ勢、雲霞ニテ責集ト聞ヘケレバ、中ニ取籠ラレテハ叶ワジトテ、鎧ノ一ノ板、切落シテ、二三所権現ニ献リテ、相模国へ引帰テ、ヤクノ山へ逃籠ニケリ。

と、「廿一 頼朝可追討之由被下官符事」の頼朝追討院宣の前に据えられた場面である。

これ以降、物語の視座は関東から京へと戻り、一連の頼朝拳兵譚は終結を迎える。

大庭の脅威を背にし、その脅威に恐れる弱き頼朝を語って始まった延慶本の拳兵譚は、反転して大庭が逃げ籠もり、弱さを物語上に露呈させ、頼朝の勢が雲霞のごとくに強くなっていく、正負の力の逆転を描く狙いがあるのであ

る。

拳兵譚は頼朝が將軍に君臨するに至る初期過程を描くのみならず、東国武士を掌握していく過程、そして石橋山合戦で頼朝を敗戦に追いやった敵である大庭攻略の過程、以上三つの過程が物語上に設定できる。拳兵に際して、頼朝が平家の前に打ち落とさなければならなかった敵は、三代相伝の主である自分を背いた大庭であり、延慶本はその敵を大庭ひとりに集約し、力の拮抗、転換をより明確に構築していると断言できるのである。

延慶本第二末「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」が拳兵譚の冒頭に、より印象的に据えられたのは、ただ歴史叙述として、単に頼朝の元へ佐々木が真つ先に馳せ参じたことを述べる意図のみではない。そこには延慶本の確実な構想がある。頼朝が大庭を意識して拳兵を臨み、力の反転を物語上に浮かび上がらせる構想が、拳兵譚に介在していることを示唆したが、それを考慮して「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」に立ち返ると、佐々木の参陣が延慶本で印象的に記される理由が分かるのである。

佐々木一族こそ大庭景親に近い人物であり、佐々木秀義が大庭の内々の情報を頼朝に告げ、「恩」よりも「三代相伝の主」を重んじて、四人の子供を拳兵に馳せ参じさせた人物であることを再認識しなければならない。

佐々木秀義には五人の子供がおり、二郎経高は物語でも語られるように大庭景親方、渋谷重国の婿であった。また、五郎義清は母が渋谷重国の娘であり、大庭三郎の妹婿であった。義清は石橋山合戦では大庭方に参じており、源平盛衰記では五郎に関して次のような記述を擁している。

「五郎義清ハイカニ」ト尋給へバ、「大場三郎ガ妹ニ相具シテ候へバ、人ノ心難知侍リ。志思進セバ参ンズラン。左右ナク知セジト存也」トテ、不呼ケリ。

(卷第十九 佐々木取馬下向)

と、佐々木一族が大庭と血縁關係を有していたことを明記している。

『尊卑分脈』にも義清が相模大庭に住んでいたことが記されており、佐々木と大庭・渋谷の關係が如何に重厚なものであつたか自ずと知れよう。

秀義自身も、『吾妻鏡』治承四年八月九日条に

近江国の住人佐々木源三秀義といふ者有り、平治逆乱の時、左馬廐の御方に候し、戰場に於て兵略を竭す、而るに武衛事に坐するの後、旧好を忘れ奉らず、平家の權勢に諛らざるの故に、相伝の地佐々木庄を得替せらるるの間、子息等を相率ゐ、秀衡（秀義の嫡母の夫なり）を恃みて、奥州に赴く、相模国に至るの刻、渋谷庄司重國、秀義の勇敢に感ずるの余、之を留め置かしむるの間、当国に住して、既に二十年を送り畢んぬ。

と記されており、平治で敗戦し、諸国流浪の身となつた秀義が渋谷の庇護を受けていたことを示している。また、長田入道の、兵衛佐謀叛を伝える書状を見た大庭景親は、秀義を招いて、

景親之を聞きしより以降、意潜かに周章す。貴客と年来芳約有るの故なり。仍つて今又之を漏脱す。

と、大庭景親が佐々木秀義との親密さ故に、内々に情報を漏らしたことを記す。

佐々木家伝の一つとして目される『奉公初日記』⁽⁴⁾には

秀義渋谷にありて、こ郷_ニ返事を不得して、渋谷ノ庄司・大庭三郎等、平家_ニ可_レ参由を度々教訓す。

と、平家に奉公することを、秀義が渋谷・大庭に勧められていたことが記され、平家方武士と近い間柄であつたことがわかる。しかし同時に

秀義平家参たらんには、などか蒙_レ御恩をも、近江国_ニ返ざらん。されば庄司もたび／＼可_レ参の由を申せども、いくばくかさかひをえんとてか、二かどる馬をばたつべき。

と、源氏再興を好み、伊豆の流人であった兵衛佐に、太郎定綱・三郎盛綱を遣わしたことを記している。

つまり、秀義は平家方東国武士の恩恵を多大に受けながらも、源氏再興に自らの所領奪還を懸けて、二十年の間、来るべき頼朝の挙兵を支え、その決起を切に待っていた武士であると規定できる。

延慶本の「下野ノ宇都宮ニ有ケル大郎定綱ヲ呼テ」「相模ノ波多野ニ有ケル三郎盛綱ガ許ヘ」という記述から、兄弟が在地領主の婿として身を立っていたこと⁽⁵⁾が想定され、また源平盛衰記や吾妻鏡にも佐々木秀義一族の複雑な境遇を記されていることから、当時の認識として、佐々木秀義の身上を物語本文に照射することは可能である。次章で延慶本の本文を、佐々木一族の境遇と照らし合わせて読み解いていきたい。

二 佐々木二郎経高の存在が意味するもの——境遇が波及する物語構想

延慶本と源平盛衰記で大きく異なる点として、二郎経高に関する記述があげられる。源平盛衰記は巻第十九「佐々木取馬下向」に「其中に高綱ハ心モ剛ニ身モ健也」と、高綱参陣に対して記述が多く、京より駆けつける際に馬を盗む話も載せているが、二郎参陣に関して記載は少なく、「次郎盛経相模国波多野ヨリ馳参。三郎盛綱同国渋谷ヨリ馳来ル」と、二郎の婿入り先が、延慶本でいう三郎のものに入れ替わっており、源平盛衰記が二郎の描写に関して、何ら関心がなかったことの表れと思われる⁽⁶⁾。

二郎経高に関して、吾妻鏡は治承四年八月十七日条に「定綱、経高は疲馬に駕し、盛綱、高綱は歩行なり」と参陣の様子を記す際に名前が見えるが、渋谷の婿であることや、参陣の際の舅重国との問答は記載されない。十六日条に「十九日には、露頭其の疑有るべからず。而るに渋谷庄司重国、当時平家に恩仕せんが為に、佐々木と渋谷と亦同意の者なり」と、佐々木と渋谷の濃密な関係を示しているもの、頼朝へ参陣する二郎の経緯に関しては全く触れら

れていない。八月廿六日条に、

又景親、洪谷庄司重国の許に行向ひて云ふ。佐々木太郎定綱兄弟四人武衛に属し、平家を射奉り畢んぬ。其科有むるに足らず。然れば彼身を尋ね出すの程は、妻子等に於ては、囚人たるべし。重国答へて云ふ。件の輩は、年来の芳約有るに依り、扶持を加へ訖んぬ。而るに今旧好を重んじて源家に参ずる事、禁制を加ふるに據無きか。重国貴殿の催に就きて、外孫佐々木五郎義清を相具し、石橋に向ふの処、其功を思はず。定綱已下の妻子を召禁しむべきの由命を蒙る。今更に本懐に非ざる所なり。景親理に伏して帰りに去るの後、夜に入りて、定綱、盛綱、高綱等、宮根の深山を出づるの処、醍醐禪師全成に行逢ひ、之と相伴ひて重国の洪谷の館に到る。重国喜び乍ら世上の聴を憚り、庫倉の内に招きて、密々膳を差め、酒を勧む。此間、二郎経高は、討取らるるか由、重国之を問ふ。定綱等云ふ。誘引せしむるの処、存念有りと称して伴ひ来らず。重国云ふ、子息の儀を存すること、已に年久し。去る比武衛に参ずるの間、重国一旦加制すと雖も、之を敍用せず。遂に参ぜしめ畢んぬ。合戦敗績の今、重国の心中に恥ぢて来らざるか、則ち郎従等を方々に遣はして相尋ねしむと云々。重国情有り。聞く者感ぜざるなしと云々。

と、敗戦武士となった佐々木兄弟とその妻子に対する処遇が記されている。重国には佐々木兄弟と秀義を通じて深い縁があり、敗戦武士である兄弟を手厚く保護した描写は最もであるが、石橋合戦後「妻子を召禁しむべき」措置を取らせることを思うと、婿である経高に対する切々な情こそが兄弟を困う所以であると考えられ、この吾妻鏡の記載の性質を思うと、洪谷重国との結び付きの強さが、詳細な経高の描写を導くことが分かる。

この記載から読みとれることは、重国と経高が舅・婿の関係であること。又拳兵に際して重国と経高との間で何らかの葛藤があったことを記しており、延慶本の経高の言葉伝承に繋がると考えられるが、あくまでも吾妻鏡の描写は重国方の視点であり、経高の言葉としては定綱の口を介した「存念有り」のみで、延慶本に見える経高の言葉伝承の始発を探る手がかりとはならない。

他の史料における佐々木兄弟の記述を考察すると、「玉葉」では、まず定綱が佐々木の嫡流として相伝の地佐々木莊を知行し、それを廻る延暦寺との騒動が、建久二年四月の条に見られる。子息廣綱が後鳥羽院北面武士であったことも考え併せると、京に比較的名前が知られた人物であったと考えられる。「玉葉」以外にも群書類従所収「渋柿」に、「定綱は宮仕も勲功も有がたく」と、この建久二年潤十二月廿八日の文書の真偽は不明ながらも、定綱の勲功に関して理解が寄せられていたことが分かる。

三郎盛綱に関しては「玉葉」元暦二年三月廿八日条に、「平家伐られおわんぬの由、此間風聞す。是佐佐木三郎と申す武士の説と云々」と、京へもたらされた情報が、佐々木三郎のものであったと示され、戦場の情報源として認識されていたことが分かる。また「奉公初日記」には盛綱に関する詳細な記載があり、その記載から、「奉公初日記」の家伝的性格、特に盛綱流との関わりの深さを、鈴木彰氏が論究されている⁽⁷⁾。又、四郎高綱は「玉葉」建久二年四月廿六日条に、「高綱は定綱の弟なり」と、一条能保の言として名前が見える。

しかし、二郎経高の名前は玉葉にはない。

吾妻鏡には正治二年七月廿七日条に「佐々木中務丞経高、帝都警衛の人数たりながら、朝威を軽んじ奉るの条々なり」と後鳥羽院の逆鱗に触れたことを記し、翌八月二日条には

是日来聊か罪科に依りて、沙汰を經らると雖も、勲功他に異なる間、暫く相宥むるの処、洛中警衛の士として、京都を騒がしめ、叡慮に背くの条、私に寛宥に及び難きの旨、再往沙汰を經られて、此の如しと云々

と、挙兵時の勲功ゆえに、関東は沙汰を見合わせていたことが記されている。

関東に「勲功他に異なる」という配慮はされていたものの、経高は兄弟の中で、史料上影が薄い存在であると定義で

さる。

しかし延慶本は「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」で経高の言葉に重点を置いているのである。史料と物語の間に生じた経高に対する比重の差は、何に由来するのであるうか。

以下延慶本の経高の言葉を検証する。

「但二郎ハ渋谷庄司ガ掣ニテ、子ニモ劣ズ思タムナレバ、ヨモ与セジ。三郎計ヲ具セヨ」ト候シ」ト申ケレバ、二郎経高是ヲ聞テ申ケルハ、「三郎ニモ四郎ニモナ告給ソ。ソレヲハイカニモ思キルマジキ者也。兵衛佐殿サ程ノ大事ヲ思立給ニ、人ヲバ不可知、経高ニヲキテハ善悪可参」ト申ケレバ、

この記述から、頼朝の言葉をして経高を参陣しない者として位置付けていることが示され、その言葉に経高が反論している。ここには「三郎ニモ四郎ニモナ告給ソ」「人ヲバ不可知」と、頼朝拳兵が疑心暗鬼の中、兄弟間ですら参陣の本意が掴めない、危うい状況を窺わせる。

源平盛衰記にも巻第十九「佐々木取レ馬下向」で、「大場三郎ガ妹ニ相具シテ候ヘバ、人ノ心難レ知侍リ」と、頼朝の、五郎が参陣しないことへの問いかけに答える場面で兄弟間の複雑な状況を物語っている。

又「奉公初日記」には頼朝の言葉として、「東国の源氏をもよをして、平家を追罰すべきよしのせられたれ共、人の心難レ知ければ、未レ披露也」と、頼朝内部にある猜疑心を露呈させている。どう転ぶか分からない危うさが、拳兵譚の緊迫感を増長させている。

延慶本を見ても、他本を考慮しても、頼朝拳兵は当初から安定していたのではなく、直前まで猜疑心がつきまわっていたことが分かる。その中で頼朝から「ヨモ与セジ」と言われながらも「思切」て参じた経高。彼は物語上どのよう機能するのだろうか。

參陣しようとする経高と舅の渋谷重国とのやりとりで、

二郎経高ガ舅渋谷庄司、人ヲ走カシテ経高二申ケルハ、「何二人ヲ迷ハサムトハスルゾ。コト人共ハ行ドモ、経高一入ハ留ルベシ」ト云遣シタリケレバ、経高申ケルハ、「殊人々コソ、恩ヲモ得タレバ、大事トモ思ラヌ。経高ハサセル見タル恩モナケレバ、更ニ大事トモ思ワズ。カク云ニ留ラズハ、妻子ヲトッテイカニモコソハナサムズラヌ。思切テ出事ナレバ、全ク妻子ノ事心ニカ、ラズ。サリトモ佐殿世ヲ執給ハ、経高ガ妻子ヲバ誰カハ取ハツベキ」ト、散々ニ返答シテ、打通りヌ。

と、経高が渋谷との浅からぬ関係を反故にし、妻子への情も振り払って頼朝の元へ参ずる次第が描かれる。

この二箇所で見過できない点は、経高に「思切」という言葉があてはめられていることである。延慶本第三本「十二沼賀入道与河野合戦事」に、「今ヲ限ト思切テ戦ケルニ」と、死の覚悟を決めた武士の戦う様子に用いられている。この場面で経高が使用する「思切」も、死の覚悟という意味の使用をされていると思われる。

つまり、頼朝参陣に相当の覚悟を決めて臨んだ経高像が浮かび上がるのである。

「イカニシテ来タルゾ」ト宣ケレバ、「千人ノ庄司ヲ、君一人ニ思替参セ候ベキニ候ワズ」ト申ケレバ、

ここで、「イカニシテ来タルゾ」という延慶本の頼朝の言葉は、長門本では「経高はしづやが浅からず思たるなれば、よも参らじとこそ思つるに、いかにして来りたるぞ」と、記述がよりわかりやすくなっている。

延慶本には主語が記されていないが、前後関係より遅参してきた佐々木兄弟に言葉を述べる頼朝と、それに答える経高という構造となっており、頼朝の目にまず留まったのは、渋谷を振りきって参じた経高なのである。如何に物語上、「三代相伝の主を重んじ、頼朝の元に参じる」行為が重要視されていたかが読みとれるのである。

史料の中では影の薄い二郎経高も、延慶本では頼朝拳兵に機能している。それは彼が渋谷の婿であったからこそ延慶本が抱える「絶対的存在＝頼朝」という構想を、より一層その身に担うことが出来たのである。延慶本の経高に関

する記述は、「奉公初日記」に見える盛綱のように、我流の家伝としての様相は呈していない。家伝を越えて、渋谷の婿という境遇を、物語の構想として組み込もうとする働きが、史料上影の薄い経高に言葉を与え、参陣の場面で重要な位置に据えられた理由と結論付けられるのである。

佐々木一族の複雑な境遇は父・秀義が相伝の地を追われ、渋谷の庇護下にあったことを始発とする。頼朝挙兵に際し、秀義は大庭からの情報を真つ先に伊豆へ伝えた。その行為は平家方武士の恩を欺くことになる。秀義は大庭を裏切り、経高は渋谷をはねのけた。

延慶本の挙兵譚に、大庭景親のみを目下の頼朝の敵として位置付けようとする狙いがあることは先述した。挙兵譚の冒頭に据えられた「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」は、大庭を裏切る佐々木秀義の行為で幕を開ける。延慶本の秀義と経高に背負わされたのは、挙兵譚の冒頭、まだ頼朝を取り巻く状況が危うい中で、頼朝を絶対的存在として掲げ、平家方武士の恩を蔑ろにしてまでも一族の運命を賭けた、当時としては稀有な忠義ある武士の姿であった。それには佐々木という、大庭、渋谷という頼朝の敵の庇護を受けていた境遇であったからこそ背負える機能であったといえる。

延慶本第五本「六 梶原与佐々木馬所望事」で、頼朝が佐々木高綱に名馬生食を与えた理由として、父秀義の十三年の追善供養に感銘を受けたことを上げている。又、秀義が平治の乱で義朝の為に奮戦しながらも討死したことをも併せて理由として上げている。秀義が死んだのは「吾妻鏡」によれば元暦元年八月二日、伊賀平氏との合戦においてであり、宇治川合戦が行われた元暦元年一月十日に、死後十三年の追善供養では史実と全く噛み合わない。また、「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」に見える秀義の描写とも年代的に錯誤があり、延慶本で秀義の捉え方が一貫しておらず、未整理のまま取り込まれているという外ない。しかし、長門本では池ずきを与える理由を「兵衛佐、いかゞ

おもはれけん」と秀義に求めず、あいまいなまま記載する。二本を比較すると、佐々木秀義への意識が、延慶本でより強いことが理解でき、延慶本は秀義を長とする、佐々木一族の境遇に関して、物語内部に取り込もうとする働きがあると言えるのである。

三 頼朝の言葉伝承——佐々木遅参がもたらす頼朝の冥加

延慶本の「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」に見える言葉伝承として特徴的なものとして合戦の勝敗を、自らの冥加の有無に託す頼朝の言葉がある。

「是ヲ以テ頼朝ガ冥加ノ有無ハ、ワ人共ガ運不運ヲバ知ベシ。但佐々木ノ者共ガ、サシモ約束シタリシガ、未見ヘヌコソ本意ナケレ」ト宣。

と、記され、長門本共にはほぼ同文である。

又延慶本には遅参した佐々木兄弟に対して頼朝が発する「頼朝ガ此事ヲ思立ハ、ワ人共ガ世トハシラヌカ」という言葉がある。

長門本では「頼朝、此事を思たつは、わ人ともがみやうがとはしらぬか」となっている。源平盛衰記でこの箇所該当するのは

我天下ヲ取ベクハ可_レ討_レ得、運命限アラバ討_レ得事難カルベシ。吉凶唯此事ニアラン。今夜則夜討ヲ入ベシ。舍弟等ヲ相催給ヘ。事成就アラバ旁ノ世ナルベシ。深憑思フ也

と、『吾妻鏡』治承四年八月十七日条に見える「今度の合戦を以て、生涯の吉凶を量るべきの由仰せらる」と、頼朝が山木判官夜討に「吉凶」を賭けていたことを記している点で一致しているが、延慶本は「吉凶」ではなく、「冥加」

という言葉を用いている。そして長門本では「わ人ともがみやうが」と、佐々木兄弟達の「冥加」として、延慶本源平盛衰記が「世」とする表現に対応させている。

生形貴重氏は、頼朝の行動の背後には神意が認められる記述が為されていることを指摘し、頼朝の勝利への軌跡を神意によって説明づけようとする物語的な構想を、合戦譚に関して述べておられる⁽⁸⁾。延慶本では、佐々木参陣に見られるこの「冥加」の使われ方からも、頼朝の勝利を「冥加」という言葉によって左右させる狙いが他本より強く働き、神意による頼朝の勝利啓示構想の一端を示していると考えられる。

延慶本第二末「十二 兵衛佐国々へ廻文ヲ被遣事」には前述箇所と類似する表現がある。

三浦義明が一族を前にして述べた言葉、

各々早ク一味同心ニテ、佐殿ノ御許ニ参ズベシ。若冥加オワセズシテ、打死ヲモシ給ハ、各々又頭ヲ一所ニ可並。山賊、海賊ヲモシタラバコソ瑕瑾ナラメ。佐殿、若シ果報ヲハシテ、世ヲ執給ハ、己等ガ中ニ一人モ生残タラム者、世ニ逢テ繁昌スベシ。

である。頼朝に「冥加」「果報」という、神意を推し量る言葉を用いているが、三浦の者どもには「世」という言葉を適用している。それは神意を受けるのは頼朝一人という、延慶本の構想の表出と見ることができる。

他にも、第二末「七 文学兵衛佐二相奉ル事」で、文覚によって「高運ノ相」「大果報ノ人」「日本国ノ大將軍」と予見された頼朝は、文覚がもたらした父・義朝の首に向かい、「誠ニ我父ノ首ニテオワシマサバ、頼朝ニ冥加ヲ授ケ給へ」と涙ながらに語る。

又、文覚に心うち解けない頼朝であるが、拳兵に関してには心中に、「南無八幡大菩薩、伊豆箱根両所権現、願ハ神カヲ与給へ」と願っていることを考え併せると、頼朝が拳兵に際して、神仏の加護、冥加を、切に望んでいたことを

示している。

よって、「九 佐々木者共佐殿ノ許へ参事」の頼朝の言葉に「冥加」という言葉を集約させた延慶本は、より頼朝と冥加を強固に結び付かせる構想を有していると結論付けられるのである。

頼朝と「冥加」との結びつきが強いことを述べたが、頼朝の言葉以外にも「佐々木者共佐殿ノ許へ参事」には冥加の現れと位置付けられる行為がある。

それは佐々木兄弟の遅参である。

この遅参に関しては柳田洋一郎氏が「計画実行の可否をせまるせっぱつまった場面を際立たせるためではなかったか」とし、「遅参を許される特異な人物として佐々木の人物像を成長させていったのではないか」と、延慶本から吾妻鏡へと至る人物像の変遷を論究されているが^⑨、今一度、頼朝と「冥加」の結び付きの強さを考慮した上で、佐々木の遅参を考えてみたい。

まず、佐々木兄弟の参陣、及び挙兵の日取であるが、延慶本と源平盛衰記、そして吾妻鏡では差が生じている。

四部合戦状本では「八月十七日に、佐々木太郎定綱、父秀義が使にて北条へ参りて申しけるは」(巻第五 頼朝安房国落)と、十七日に佐々木兄弟が参陣、その夜に山木討ちという運びになっている。

源平盛衰記も四部合戦状本と同様に佐々木兄弟の遅参を記さず、十七日の午ノ刻に頼朝が定綱を呼び、密に夜討ちを打ち明けた記述になっている。延慶本・長門本が、佐々木兄弟が遅参しながらも参陣した日時を十七日の未の刻とするのとは相違している。

吾妻鏡は、治承四年八月十二日条に「兼隆を征せらるべき事、来る十七日を以て其期と定めらる」と、挙兵の日が予め決められており、又十六日条に「佐々木兄弟、今日参著すべきの由、仰含めらるるの処、参らずして暮れ畢ん

ぬ」と、佐々木兄弟が約束に反して遅れていることを記している。そして十七日条には、未の刻に参陣した佐々木に對して、「汝等の遅参に依りて、今暁の合戦を遂げず。遺恨万端の由仰せらる」と、頼朝が遺恨を述べたことを記している。

延慶本・長門本は「屋牧判官兼隆ヲ夜討ニスル事」に、

猿程二十六日ニモナリニケリ。兵衛佐、北条四郎ヲ召テ宣ケルハ、「日来月日ノ立ラコソ待ツレバ、今夜、平家々人当国目代、和泉判官兼隆ガ屋牧館ニアムナルヲ、ヨセテ夜討ニセムト思ナリ」

と、頼朝は十六日を挙兵の日と決めていたが、十六日に参じる約束をした佐々木兄弟が見えないことを「本意ナケレ」と感を漏らし、続いて、頼政が言う

今夜ハ当国ノ鎮守三嶋大明神ノ神事ニテ、当國中ニ弓矢をヲ取事候ワズ。且ハ佐々木ノ者共ヲモ待セ給。吉日ニテモ候、明日ニテ候ベシ

という言葉で、挙兵の日が十七日になったことを記している。

延慶本で挙兵の日取りは、頼朝が独自に十六日としたのを、思慮深い頼政が、佐々木の遅参と、神事を理由に十七日に修正する手筈となっている。しかし、頼政の配慮にも関わらず、十七日暁という挙兵の段取りをも狂わせてしまう佐々木の遅参を、物語はどのように解釈しようとするのか。

佐々木は遅参の理由に關して「十五日ニ参ベキニテ候シホドニ、三郎四郎ヲモ待候シ上、折節此ホドノ大雨大水ニ、思ワザルホカニ一日逗留シテ候」と語る。

吾妻鏡にも「洪水の間意ならず遅留せるの旨、定綱等之を謝し申すと云々」と記され、佐々木の遅参の理由として「洪水」は史料にも見え、事実と捉えられていたのであるが、十七日の決行を予め十二日の段階で頼朝が示唆して

いる吾妻鏡と、決行日時に修正に修正を重ねざるを得なくなった延慶本との間には、物語の構想上に差異を感じる。つまり、延慶本で挙兵の日時を決めたのは予定外に遅れた佐々木の参陣であり、佐々木の参陣が未の刻であったからこそ、雑色男を捕らえる幸運に当たり、山木の夜討ちを成功に導くのである。

この流れを押さえると、佐々木の遅参によつて挙兵の日時は頼朝でもなく、時政でもなく、佐々木によつて変えられていった印象を強くする。

予定外の挙兵による勝利は、人知を越え、「洪水」という天災によつて遅れた佐々木が導いたといえるのである。そこには偶然の産物では片付けられない、見えない力が働いたと解釈できる。頼朝と冥力との結び付きの強さを思うと、挙兵譚冒頭に据えられた「佐々木者共佐殿ノ許へ参事」には、頼朝につきまとう冥力を佐々木の遅参という形で具体化し、史実を越えて、冥の世界から頼朝の勝利を導く構想が潜在していると云えるのである。

佐々木は、山木夜討の成功、すなわち、頼朝の「冥加ノ有」に対して、見える形では

十七日ノ子剋計、北条四郎時政、子息三郎宗時、同小四郎義時、佐々木太郎定綱、同二郎経高、三郎盛綱、同高綱已下、彼是馬歩人トモナク、三十余人、四十人計モヤ有ケム、屋牧館へゾ押寄ケル

と、挙兵に名が挙がる武士として現れるが、見えない形としては、遅参によつて挙兵成功のきっかけをもたらす、「冥力」の体現として存在しているのである。

おわりに

以上、「佐々木者共佐殿ノ許へ参事」の諸問題を考察してきた。延慶本は、吾妻鏡や「奉公初日記」に窺える家伝としての性格をそのまま物語に持ち込んだのではなく、頼朝賛嘆の構想に即する形に変容させて存在たらしめている

ことが分かった。

大庭に怯える弱き頼朝が將軍へと昇華する。——その最初期において、頼朝への忠義を示し、「恩」を裏切つてまでも「相伝の主」に参じた佐々木の姿を描くことに延慶本は終始した。

それは佐々木という複雑な境遇がもたらす効果であり、不安定な頼朝の拳兵が、関東の平定、天下掌握を遂げていく「冥」の力をも、その身に負わされることになる。

佐々木が物語に果たした機能とは、頼朝拳兵に纏わる明（冥助）と、暗（大庭の脅威）を、言葉伝承、そして遅参という形で知らしめることにあると考えられる。

注(1) 山下宏明氏「逆照射の方法」〔平家物語の生成〕一九八四年一月二〇日、明治書院刊所収

(2) 砂川博氏「延慶本平家物語における伝承とその受容——山木夜討説話の場合——」〔日本文学〕一九九一年二月

(3) 松尾葦江氏「東国のいくさ語り」〔伝承文学研究〕第三七号、一九八八年二月。『軍記物語論究』一九九六年六月、若草書房刊所収

(4) 『奉公初日記』は野田文書に見える佐々木氏の動向を記したものであり、西岡虎之助氏が「佐々木荘と宇多源氏との関係」〔莊園史の研究〕下巻一、昭和三二年五月二日、岩波書店刊所収に翻刻されているものである。本稿では西岡氏の翻刻を元に濁点等補つて用いている。尚、日記の成立年代に関して、文書群末尾に「康永三年二月十九日」の記載があることから、鈴木彰氏は下限を一三四四年と見定めている（佐々木家伝「奉公初日記」をめぐる一考察——自己認識と家伝、その継承と創作——）、「早稲田大学高等学院研究年誌」四五、二〇〇一年三月。また野口実氏は「奉公初日記」が平家物語との照会により、延慶本と一番近いことを述べられている（『流人の周辺——源頼朝拳兵再考——』、『中世東国武士団の研究』、一九九四年十二月十日、高科書店刊所収）。

(5) 前掲(4)、野口実氏論文

(6) 亀田昴子氏「物語における佐々木兄弟」〔吾妻鏡〕と中世物語、一九九四年三月十日、双文社出版刊所収

- (7) 鈴木彰氏「中世武家社会と『平家物語』——応永二十一年、佐々木三郎長綱の「庭中言上」をめぐる——」（『日本文学』四九一七、二〇〇〇年七月）
- (8) 生形貴重氏「『平家物語』合戦譚孝——頼朝拳兵譚・一の谷の合戦 延慶本・覚一本をえぐって——」（『平家物語』の基層と構造——水の神と物語——）一九八四年、近代文芸社刊所収）
- (9) 柳田洋一郎氏「佐々木遅参の理由——延慶本平家物語と伝承の経路——」（『梅花短期大学研究紀要四五、一九九七年三月』）

本稿における本文引用は、延慶本は『延慶本平家物語 本文篇』（北原保雄・小川栄一編、勉誠出版、一九九〇年）、長門本は『長門本平家物語の総合研究 第一巻校注篇』（麻原美子・名波弘彰編、勉誠社、一九九八年）、源平盛衰記は『源平盛衰記 四 中世の文学』（美濃部重克・松尾葦江校注、三弥井書店、一九九四年）、四部合戦状本は『訓読四部合戦状本平家物語』（高山利弘編著、有精堂出版、一九九五年）、吾妻鏡は『岩波文庫 吾妻鏡』（龍爾訳、岩波書店、一九三九年）、玉葉は『玉葉』（名著刊行会、一九七一年）による。

（なかむら りえ・関西学院大学院文学研究科研究員）